

第4章 平成6年度山口大学構内の試掘調査

第1節 吉田構内の試掘調査

1 経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田遺跡の南端に位置する経済学部講義棟の東側で、経済学部商品資料館の新営が具体化した。平成5年度の後半になって山口大学への補正予算交付が決定し、その中に経済学部商品資料館新営事業も含まれていたためである。その頃、埋蔵文化財資料館は学内環境整備事業の対応に追われており、経済学部商品資料館新営も含め平成5年度補正の年度内対応は困難な状況であった。埋蔵文化財資料館運営委員会では、ただちに委員を召集し関連部局と検討した結果、補正予算事業の次年度繰越しが決定した。

経済学部商品資料館予定地付近については、昭和55年度に経済学部講義棟の試掘調査¹⁾を行っていた。調査の結果、河川と考えられる砂・シルト・砂礫の互層堆積を確認している。遺構は認められず、出土遺物もわずかに土師器小片2点という状況であった。このことから経済学部講義棟付近は、弥生時代から古墳時代にかけての小規模な沼沢地あるいは谷状の落ち込みであり、遺構の希薄な地域であると想定していた。このデータから埋蔵文化財資料館運営委員会は、まず遺構の有無を確認するための試掘調査を行うことを決定した。

また、補正予算の繰越しを行っており時間的余裕がないことから補正予算事業限りの特別措置として、試掘調査の結果に対する埋蔵文化財資料館館長の裁量権が与えられた。これにより、埋蔵文化財資料館運営委員会へは、事前調査対応以外ならば補正予算事業終了後に立会調査の結果とまとめて報告することが許可された。

試掘調査は、経済学部商品資料館の建物本体部分が平成6年4月4日から4月20日まで、電気ケーブルなどを埋設する共同溝部分は4月22日に補足調査を行った。

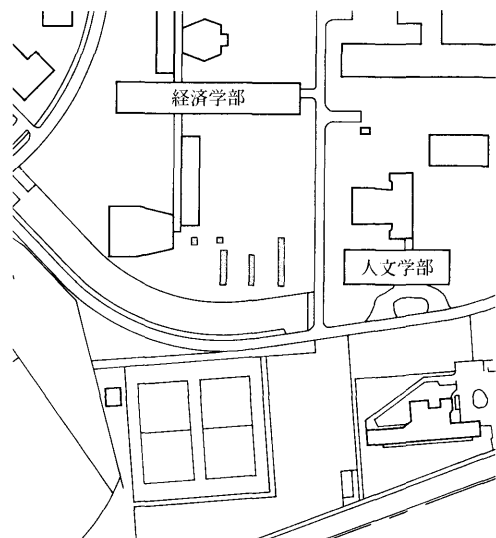


Fig.96 調査区位置図

試掘調査ではまず計画建物本体部分の西辺と東辺に、南北に長いトレンチを設定した。西辺の長さ約14m・幅2mのトレンチをA、東辺の長さ約20m・幅2mのトレンチをBとする。また、河川流路方向の確認を目的としてA・B両トレンチの中間に設定した長さ約13m、幅1.5mのトレンチをCとする。これらの調査とは別に、共同溝部分の東西両端に2m×2mのトレンチを設定した。東のトレンチをD、西のトレンチをEとする。建物本体部分及び共同溝部分を合計した調査面積は約96m²である。

試掘調査の結果、本学統合移転以前の水田と、時期不明（おそらく古墳時代以前）の河川を検出した他は顕著な遺構は認められなかった。また、遺物もほとんど出土しなかった。よって、事前調査には移行せず、トレンチの平面及び土層断面の図面記録を取り調査を終了した。

(2) 層序

層序はいずれのトレンチもほぼ同様な状況にある。基本層序は次の順である。

第Ⅰ層：淡赤褐色砂質土（マサ土、表土）

第Ⅱ層：茶灰色粘質土（瓦礫混じり）または黒色炭・灰（造成土）

第Ⅲ層：暗青灰色粘質土（水田耕土）

第Ⅳ層：茶灰色粘質土（水田床土）

第Ⅴ層：明黄灰色・青緑灰色系のシルトまたは粘土（地山）

本調査地は現地表土である第Ⅰ層：淡赤褐色砂質土（マサ土）の下に、第Ⅱ層：茶灰色粘質土（瓦礫混じり）が厚さ約40～50cmに渡って客土されている。本学統合移転時の造成土と考えられる。その下は統合移転以前の水田層で、第Ⅲ層：暗青灰色粘質土（水田耕土）、第Ⅳ層：茶灰色粘質土（水田床土）の順となる。第Ⅲ層上面の標高は20.4mである。水田床土直下に第Ⅴ層の青色あるいは黄色系のシルト層を検出した。この第Ⅴ層の上面が近代遺構と河川の検出面である。第Ⅴ層上面の標高は、Bトレンチの南で20.3m、北で20.0m、Aトレンチの南で19.8m、北で19.7mである。自然地形が東から西に、また南から北に傾斜していたと考えられる。このことは河川の流路方向や位置からも肯定できる。第Ⅴ層以下は無遺物層と考えられるが、決して安定した堆積状況を示しているとはいえない。粘土や砂礫がレンズ状に互層堆積しており、第Ⅴ層以下も河川堆積土と考えられる。このような堆積状況は、網状河川によって形成される。山口大学構内では農学部連合獣医学科棟新営に伴う調査²⁾などで確認されており、扇状地地形における特徴的な堆積といえよう。

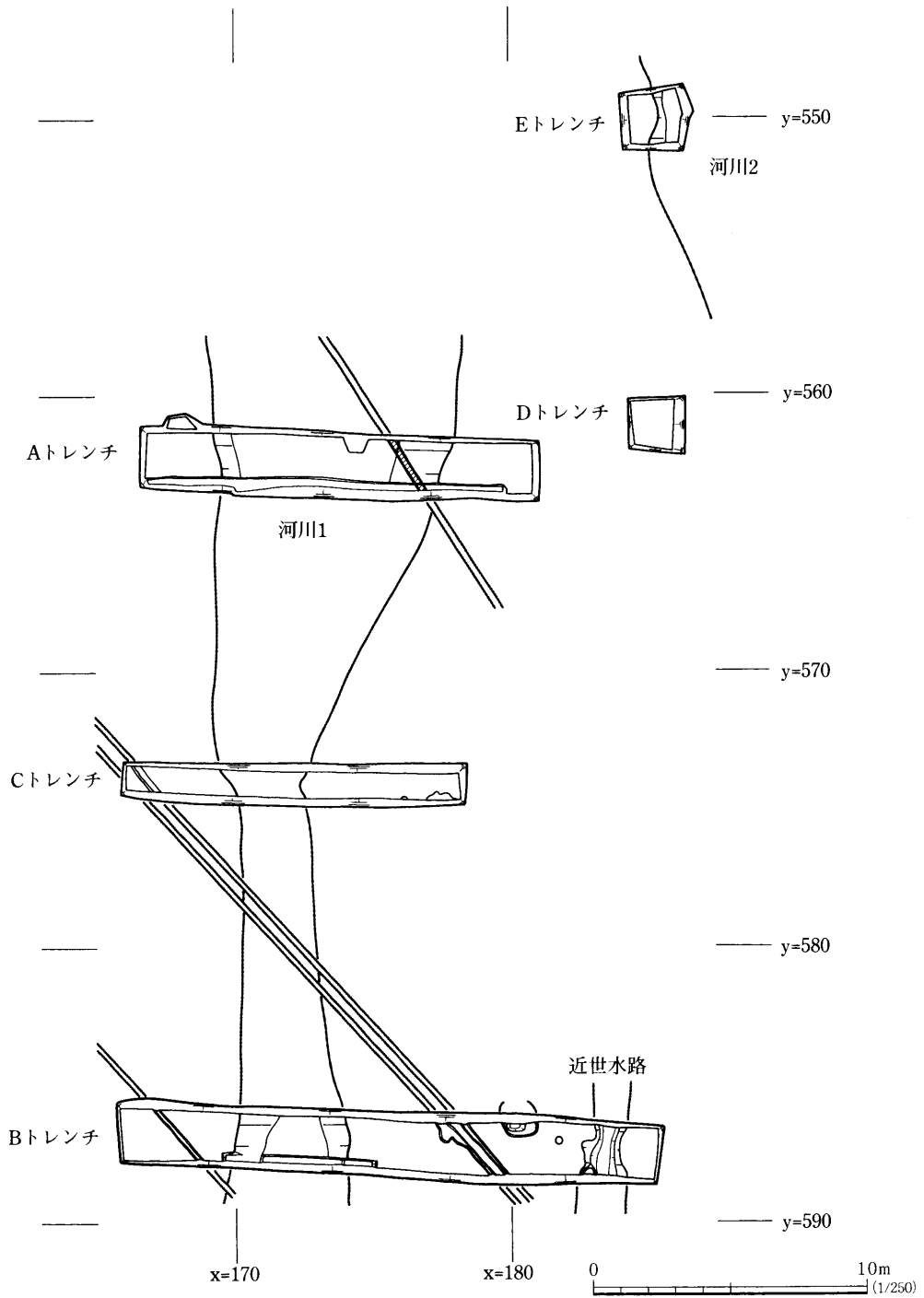


Fig.97 調査区遺構配置図

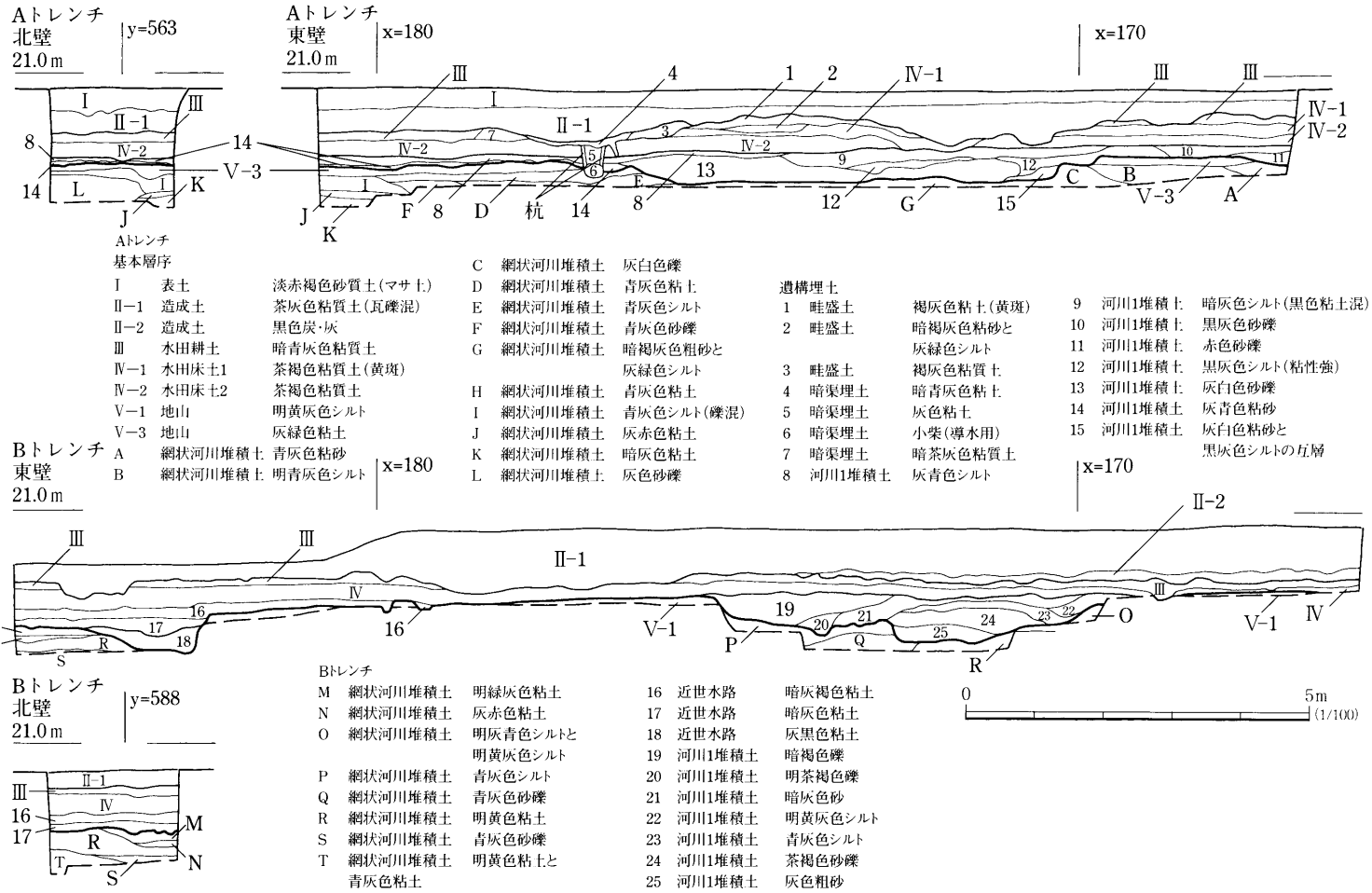


Fig.98 トレンチ壁面土層断面図(1)

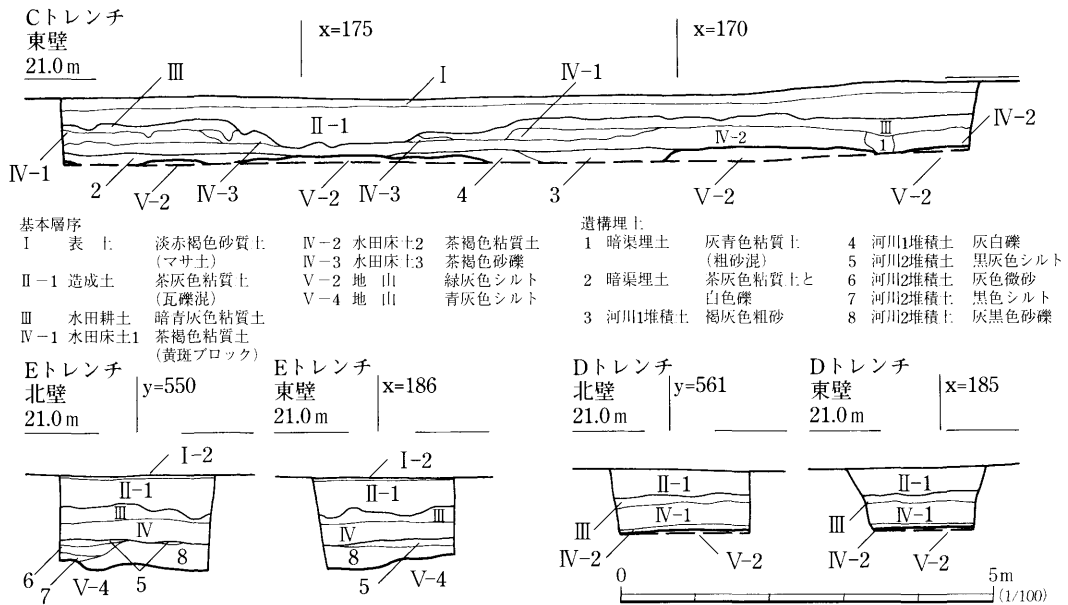


Fig.99 トレンチ壁面土層断面図 (2)

(3) 遺構・遺物

古墳時代以前のものと考えられる河川と、近世・近代の水田遺構を検出した。

河川

A・B・CトレンチとEトレンチで、流路の異なる2条の河川を検出している。前者を河川1とし、後者を河川2とする。本学統合移転前の水田などと同じ第V層上面での検出である。

河川1はA・B・Cトレンチで検出し、東西に流路方向を持つ。検出した河川の総延長は27mである。河幅はトレンチによって異なり、Aトレンチで幅約8m、Bトレンチで幅約4m、Cトレンチで幅約3mを測る。同じく深さも異なり、検出面からAトレンチで深さ約40、Bトレンチで深さ約60cmを測る。

検出面からの深さは西のAトレンチよりも東のBトレンチが深い、これは検出面の高さの影響を受けたもので、河床の標高はAトレンチが19.40m、Bトレンチが19.50mである(なお、Cトレンチは流路方向を確認するために設定しており、河床は検出していない)。東のBトレンチよりも、西のAトレンチでは河幅が広くなり、河床も深くなっている。これは河川1が東から西に流れていたことを示すものであろう。ただし、検出時の河幅については、狭い流路が幾度も切り合うことによって形成されたものと考えられ、Bトレンチ

の東壁断面では堆積土の状況からそれが明瞭に観察できた。堆積土は砂礫を主体とし、シルトなどが薄く貫入している。河床面はシルトまたは粘土であることを基本とするが、河川の堆積土と同じ砂礫層の部分があり、色調によって識別した。遺物は、時期不明の土器小片が1片出土した。

河川2はEトレンチで検出した。Eトレンチはその流路内であり、南側への上がりを確認しているが、河岸ではない。また、Eトレンチの東側にあるDトレンチではこの河川を検出しておらず、流路は蛇行していたと考えられる。調査範囲での深さは検出面から約30cmを測り、河床の標高は19.2mである。上面に黒灰色シルトが堆積するが、本流部分の堆積土は灰黒色砂礫、河床面は青灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

(4) 小結

試掘調査によって、経済学部商品資料館予定地には、古墳時代以前と考えられる2条の河川が埋存していることが明らかとなった。おそらく、本調査区の西隣接地で、昭和55年度の経済学部校舎新営に伴う試掘調査で検出した「沼沢地あるいは谷状のやや落ち込んだ地形」は、堆積状況から判断して同一の河川であったと考えられる。

本調査区の周辺では、昭和61年度に国際交流会館新営に伴う試掘調査³⁾を行い、古墳時代以前と考えられる河幅17mの河川を検出している。この河川も本調査区のものと同じく東西に流路方向を持つ。河幅17mというのは、幾度もの流路の切り合いを示しているであろう。吉田構内の北東部に位置する山塊から流れ出した河川が、幾筋にも流路が分かれ、網目状に流れていたことが判明した。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報X』、1992年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報XI』、1994年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内国際交流会館新営に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)

2 実験廃液処理施設棟新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

吉田構内の北西部、正門の西側に位置する実験廃液処理施設棟の増築が計画された。この増築計画もまた、経済学部商品資料館と同じく予算の都合上、具体化はかなり先のことと考えられていた事業であった。しかし、山口大学への平成5年度補正予算交付が決定したことによって現実化した。工事は、廃液処理槽を地下深く埋設するというもので、地下3mに近い掘削が予定されていた。

当時、学内環境整備事業の対応に追われる埋蔵文化財資料館には年度内対応の余裕はなかった。埋蔵文化財資料館運営委員会では、委員を急遽召集して会議を開き、関連部局とも検討した結果、実験廃液処理施設棟増築を含めた補正予算事業の次年度繰越しが決定した。

実験廃液処理施設棟の北隣接地では、昭和55年度に污水排水管の埋設工事が行われ、埋蔵文化財資料館が立会調査¹⁾を行っている。工事は、幅約60cm、長さ25mに及ぶ污水排水管路線を現地表下50cmまで掘削するものであったが、本学統合移転時の造成土が厚く、掘削は造成土内にとどまった。その他、九田川改修工事²⁾や正門前の環境整備工事^{3), 4)}の立会調査によって、構内北西部の正門周辺は比較的土地が低く、統合移転時に厚く客土されたことが判明している。また、九田川改修工事や正門前の環境整備工事の部分的な深掘りによって、付近一帯には吉田地区低地部の鍵層となる黑色粘土層の広がりを認めている。この黑色粘土層については、現在までに遺物は見つかっておらず、地山層と考えている。また、本調査地周辺は、過去の調査から遺物及び遺構の希薄な地域であることが明らかになっている。このため、埋蔵文化財資料館運営委員会は、土層堆積状況の把握を第一目的とし、遺構・遺物の有無を確認する試掘調査が必要であるとの判断を下した。これを受けた埋蔵文化財資料館では、平成6年4月25日から4月27日にかけて試掘調査を実施した。



Fig.100 調査区位置図

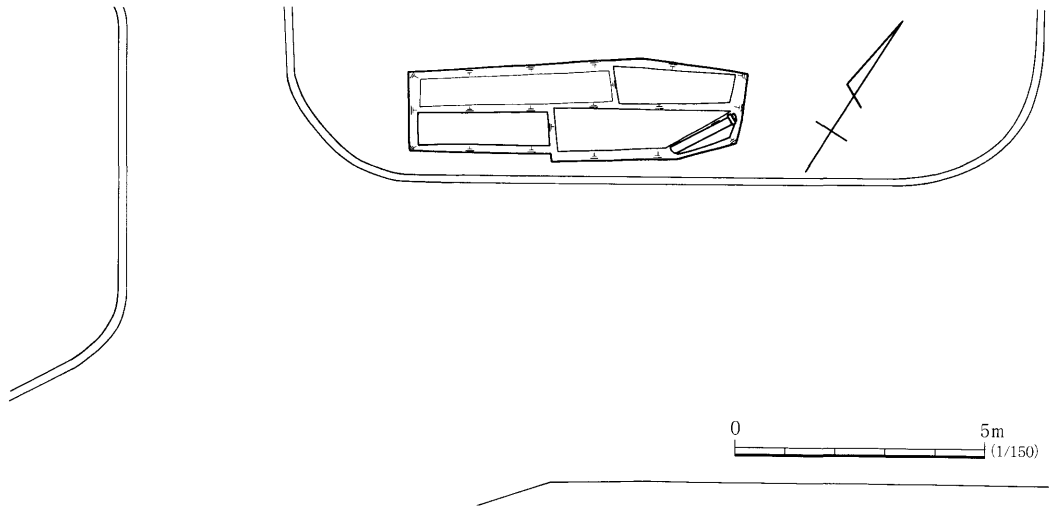


Fig.101 トレンチ設定図

トレンチは、既存の実験廃液処理施設棟の前面にある空き地部分に広く設定する予定にしていた。しかし、当初の予想通り造成土が厚く、排土処理に苦慮することになった。また、造成土部分は脆弱で、トレンチの壁が崩壊する危険があった。このため、調査は変則的な形となり、トレンチは東西長約7m・南北幅1.5mの規模に縮小した。そして、深く掘り下げるのは調査区内の北辺のみ、西側から長さ4m・幅50cmの範囲にとどめ、土層の観察をもって調査を終了した。調査面積は約10m²である。

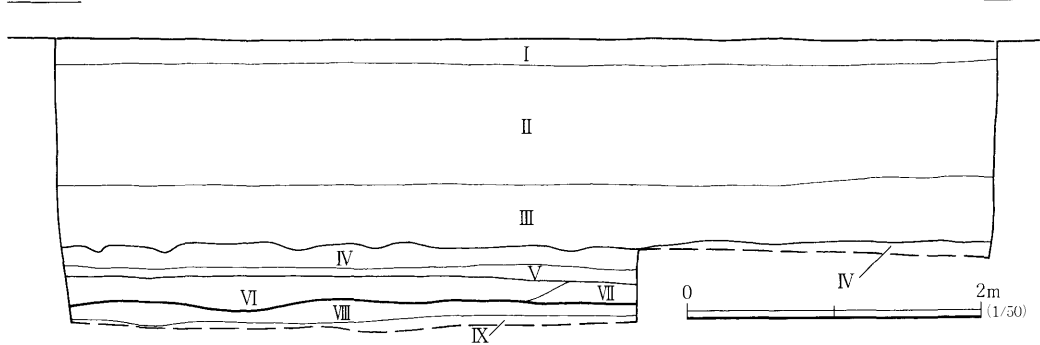
(2) 層序

本調査区における基本層序は、次の順である。

- 第Ⅰ層：マサ土（表土）
- 第Ⅱ層：茶褐色粘質土（造成土1）
- 第Ⅲ層：暗青灰色粘質土（造成土2）
- 第Ⅳ層：暗青灰色粘土（水田耕土）
- 第Ⅴ層：茶灰色粘土（水田床土）
- 第Ⅵ層：青灰色砂礫（河川堆積土）
- 第Ⅶ層：明緑灰色シルト
- 第Ⅷ層：明茶灰色粘土
- 第Ⅸ層：暗褐色粘土

現在の表土層である第Ⅰ層：マサ土の下には、本学統合移転時の造成土が厚さ約1.2m、

北西壁
18.5m



基本層序

I 表土	マサ土	IV 水田耕土	暗青灰色粘土	VII 地山	明緑灰色シルト
II 造成土1	茶褐色粘質土	V 水田床土	茶灰色粘土	VIII 地山	明茶灰色粘土
III 造成土2	暗青灰色粘質土	VI 河川堆積土	青灰色砂礫	IX 地山	暗褐色粘土

Fig.102 トレンチ壁面土層断面図

2層に渡ってみられた。その下には統合移転以前の水田耕土、床土を検出した。第IV層：暗青灰色粘土の水田耕土は厚さ約16cm、第V層：茶灰色粘土の水田床土は約8cmである。この水田層の直下に、河川の堆積土と考えられる第VI層：青灰色砂礫と、第VII層：明緑灰色シルトを検出した。第VI層：青灰色砂礫と第VII層：明緑灰色シルトの上面標高は16.6mである。通常、この第VI層：青灰色砂礫と第VII層：明緑灰色シルトの上面が、吉田構内における弥生時代以降の遺構面になっていると考えられる。第VI層：青灰色砂礫と第VII層：明緑灰色シルトの関係を土層断面図には第VII層：明緑灰色シルトを切り込むように第VI層：青灰色砂礫を表現したが、実際には第VI層：青灰色砂礫の末端が徐々に第VII層：明緑灰色シルトに溶け込むような状態であった。おそらく両層とも河川堆積層であって、河川本流が第VI層：青灰色砂礫であり、その肩部に堆積したのが第VII層：明緑灰色シルトなのであろう。なお、第VI層：青灰色砂礫は西側に向かって落ち込んでいるようであり、河川本流は調査区外の西側にあると考えられる。河川堆積層の直下は、第VIII層：明茶灰色粘土であるが、厚さは16cm程しかなく、徐々に下層の第IX層：暗褐色粘土へと変化する。第VIII層：明茶灰色粘土の検出面は、標高16.5mである。

(3) 遺構・遺物

当調査区では、河川の他に顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

(4) 小結

今回の試掘調査では、河川以外には顕著な遺構・遺物の検出はなかった。しかし、吉田構内において、従来不明な点が多かった正門付近の土層データが得られたことは、大きな成果であったといえよう。特に第Ⅷ層：明茶灰色粘土及び第Ⅸ層：暗褐色粘土の上部に第Ⅶ層：明緑灰色シルトの堆積を確認できたことは重要である。

平成4年度に構内環境整備事業の一環として正門周辺で土木工事が行われ、埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。その際、現地表下約1.5mで黒色粘土層の広がりを確認している。この黒色粘土層は20cm程の厚みを持ち、色調に褐色が混じることや乾くとパサつく土質が特徴的であった。沼沢地の泥炭層とも考えられ、吉田構内低地部の鍵層になるのではないかという期待がもたれた。しかし、この段階では、黒色粘土層がいつ形成され、吉田構内における遺構や遺物とどのような関わりを持つかは不明であった。

今回の調査で検出した第Ⅷ層：明茶灰色粘土及び第Ⅸ層：暗褐色粘土は、平成4年度に正門周辺で検出した黒色粘土層と同一のものであろう。色調に違いがあるが、地点によって黒色の濃淡が異なるようで、土質的には全く同じである。本調査地点においても、第Ⅷ層：明茶灰色粘土及び第Ⅸ層：暗褐色粘土と分層してはいるが、その変化は漸次的であり本来は同一の層形成であろう。そして、その上部に第Ⅵ層：青灰色砂礫と第Ⅶ層：明緑灰色シルトが堆積する。従来、吉田構内低地部においては、この緑色系シルト及び砂礫の上面が弥生時代以降の遺構検出面とされてきた。この層序関係が把握されたことにより、黒色粘土層の形成は縄文時代以前に遡ることが判明した。今後、理化学的な分析によって、黒色粘土層の形成時期を判定していく必要がある。

[注]

- 1) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部環境整備に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』、1992年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「九田川局部改良工事に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅺ』、1995年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査・山口大学吉田団地環境整備(正門周辺)工事に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅻ』、1994年)
- 4) 山口大学埋蔵文化財資料館「泉町平川線緊急地方道路整備工事に伴う立会調査(信号機設置)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅻ』、1994年)

3 吉田体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査

(1) 調査の経過

平成5年度に急遽、本学に補正予算が支給され、体育器具庫の新営が決定した。当初の計画では、吉田構内の南西、遺跡保存地区の北側にある旧体育器具庫の前が予定地であった。しかし、計画予定地から遺構・遺物包含層が検出されることは、遺跡保存地区との関係からも明らかであった。また、補正予算による他の事業も山積しており、埋蔵文化財資料館が直ちに対応できる状態ではなかった。埋蔵文化財資料館運営委員会は審議を行い、計画地の変更と事業の平成6年度繰越しを要望することとなった。これを受け、関連部局で協議が行われ、計画地の変更と事業の平成6年度繰越しが決定した。

変更地については、埋蔵文化財資料館と関連部局との検討の結果、陸上競技場の北東隅が妥当との判断が下された。陸上競技場は吉田構内の西端にあり、東に隣接したサッカー・ラグビー場より一段土地が低い。これは本来の地形の傾斜とともに、グラウンド造成に伴う地形改変によるもので、陸上競技場の東側は斜面がカットされていると考えられた。ただし、陸上競技場の東側付近においては過去の埋蔵文化財調査例がなく、地下のデータが不足していた。そこで、埋蔵文化財資料館では体育器具庫新営予定地において、遺構・遺物包含層の有無を確認することを目的とした試掘調査を行った。

当初の試掘調査計画では、最も深い掘削が行われる新営建物の便槽予定部分にトレンチを設定し、遺構が検出された場合、建設予定地全体の事前調査に切り換える予定であった。しかし、グラウンド層は10cm程の厚さで、直下は地山面であり、調査区周辺における削平の著しさを物語っていた。このため、建物新営部分の北辺に沿って幅2m、長さ約30mの範囲でのトレンチ調査とした。

調査の結果、2条の河川を検出したものの出土遺物はなく、周辺に顕著な遺構が認められないことから、この試掘調査をもって調査を終了した。調査面積は約60㎡、調査期間は平成6年10月3日から10月5日までである。

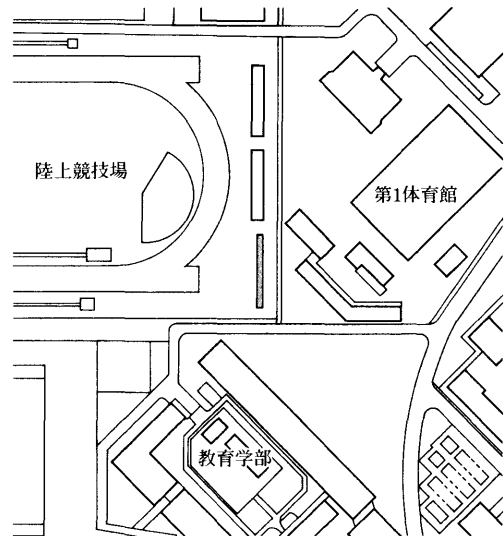


Fig.103 調査区位置図

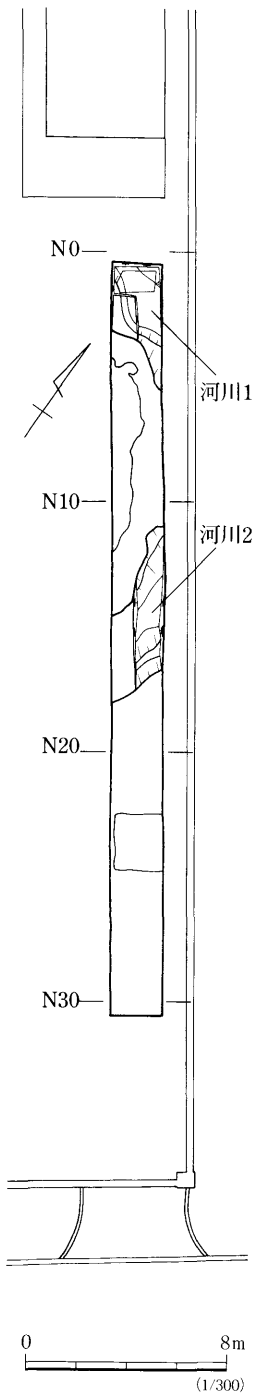


Fig.104 トレンチ
設定図

(2) 層序 (Fig.105, PL.87)

本調査区における基本層序は、次の順である。

第Ⅰ層：マサ土（表土）

第Ⅱ層：コークス透水層

第Ⅲ層：黒褐色粘土（地山）

第Ⅳ層：明黄色粘土（地山）

陸上競技場として使用されるために客土された第Ⅰ層：マサ土と第Ⅱ層：コークス透水層を取り除くと、第Ⅲ層：黒褐色粘土の地山が露出した。グラウンド層と地山層の間に、なんら堆積土が確認されない状況は、統合移転時の削平の著しさを示す。第Ⅲ層：黒褐色粘土の検出標高は17.4mである。本調査区で検出した2条の河川は、いずれもこの黒褐色粘土を切り込んでいる。ただし、削平が著しいため、本来の河川の遺構面となる土層は不明である。黒褐色粘土は厚さ約30cmで、その直下は第Ⅳ層：明黄色粘土である。また、河床面での観察から、明黄色粘土の下は砂礫層であることが判明している。

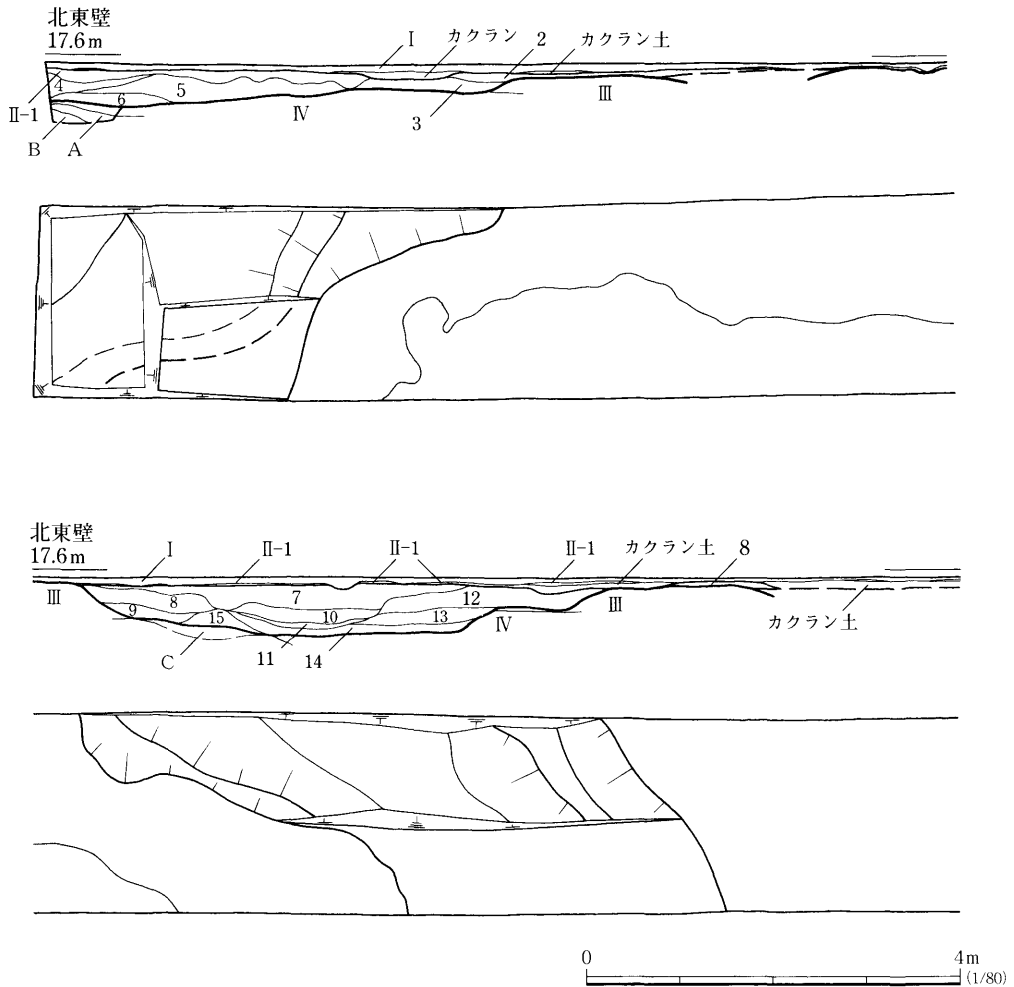
(3) 遺構・遺物

トレンチの北端と中央で2条の河川を検出した。トレンチ北端のものを河川1、中央のものを河川2とする。

河川1は南肩を検出するにとどまり、北肩は調査区外となる。検出時の河幅は3m以上である。北東から南西に流路方向を持つと考えられる。地山の黒褐色粘土を検出面とする。検出面の標高は17.40mである。河床面は、検出した最も深い位置で標高16.90mで、河床面までの深さは検出面から約50cmを測る。河川は砂と砂礫の互層によって埋没していた。河床面の地山は第Ⅳ層：明黄色粘土であるが、河川が最も深くなる調査区の南端では、青色系の砂礫層が地山となる。

河川2は東側で5.5m、西側で3.3mの河幅を持つ。北から南に流路方向を持つと考えられる。河川1と同じく地山の黒褐色粘土を検出面とし、検出面の標高も同じく17.40mである。河床面の標高は

吉田構内の試掘調査



基本層序

I	表土	淡赤褐色砂質土(マサ土)
II-1	グラント層	コークス透水層
II-2	グラント層	淡赤褐色砂質土(マサ土)
III	地山	黒褐色粘土
IV	地山	明黄色粘土
A	河川堆積土	青灰色細砂
B	河川堆積土	青灰色粗砂
C	河川堆積土	青灰色砂礫

遺構埋土

1	河川1堆積土	明黄灰色砂礫
2	河川1堆積土	暗灰黄色粘土(砂混)
3	河川1堆積土	青灰色礫
4	河川1堆積土	灰褐色礫
5	河川1堆積土	灰色細砂
6	河川1堆積土	灰色砂礫
7	河川2堆積土	明黄灰色砂礫
8	河川2堆積土	青灰色砂

9	河川2堆積土	青灰色細砂
10	河川2堆積土	灰色砂礫
11	河川2堆積土	青灰色細砂
12	河川2堆積土	灰色粗砂
13	河川2堆積土	暗灰色粗砂と細砂の互層
14	河川2堆積土	灰色粗砂
15	河川2堆積土	暗灰色砂

Fig.105 トレンチ実測図(1)

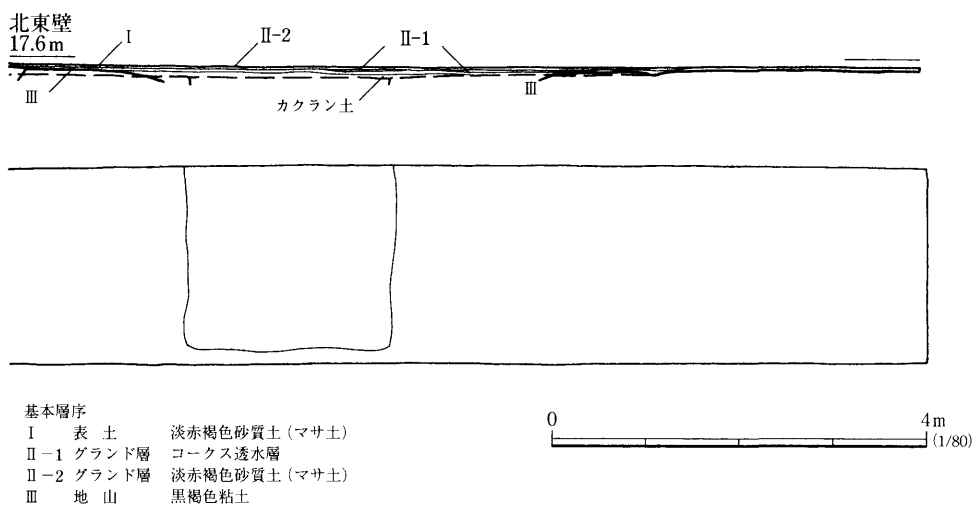


Fig.106 トレンチ実測図(2)

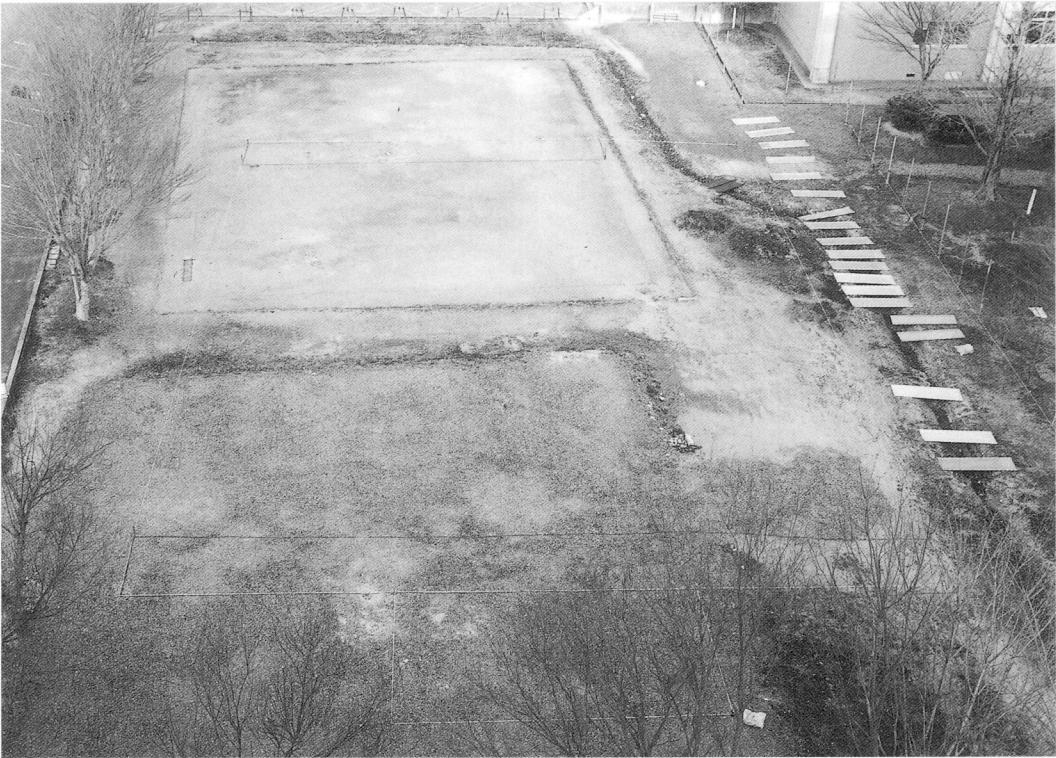
16.90m、深さは検出面から約50cmを測る。河川は砂と砂礫の互層によって埋没していた。土器小片1点が出土した。

(4) 小結

今回の調査は、陸上競技場において初めての本格的な調査である。当初の予想通り、陸上競技場の北東部は削平が著しく、地表から約10cmで地山の黒褐色粘土を検出し、時期不明の2条の河川を検出するにとどまった。本調査区内において、黒褐色粘土の検出標高は17.40mと一定しており、上面削平の著しさを物語っている。本来はこの黒褐色粘土の上面に青灰色シルトが堆積していたと考えるべきである。北隣接地で行われた第2屋内運動場施設新営に伴う発掘調査²⁾では、この青灰色シルトが遺構の検出面となっている。とすれば、遺構があったとしてもその大半は削平されており、深い河川の下部のみが残存したと考えるべきであろう。

[注]

- 1) 河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」『山口大学構内遺跡発掘調査年報X』(山口大学埋蔵文化財資料館、1992年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内第2屋内運動場新設に伴う発掘調査」(本書P.109)



(1) 調査前全景 (東から)



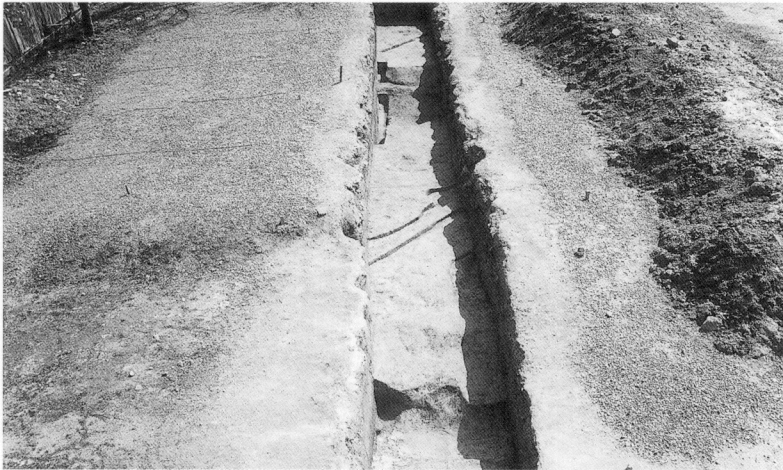
(2) 調査区完掘状況 (東から)



(1) A トレンチ全景 (北から)



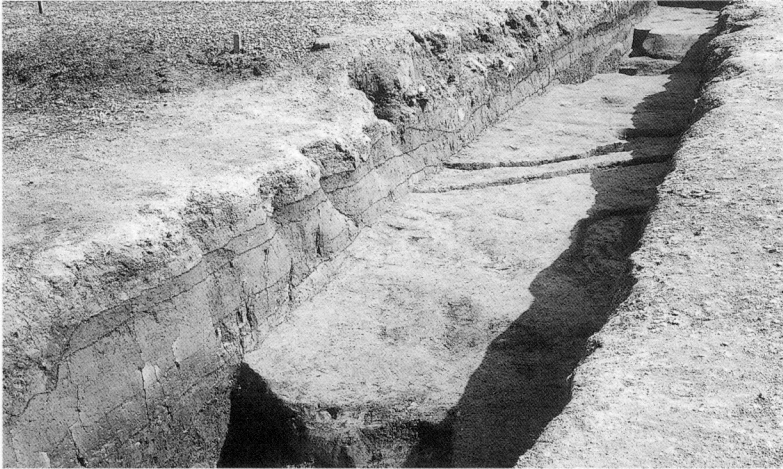
(2) A トレンチ河川1 土層断面 (北西から)



(3) B トレンチ全景 (北から)



(4) B トレンチ河川1 土層断面 (南東から)



(1) B トレンチ遺構完掘状況 (北西から)



(2) C トレンチ全景 (北から)



(3) D トレンチ完掘状況 (東から)

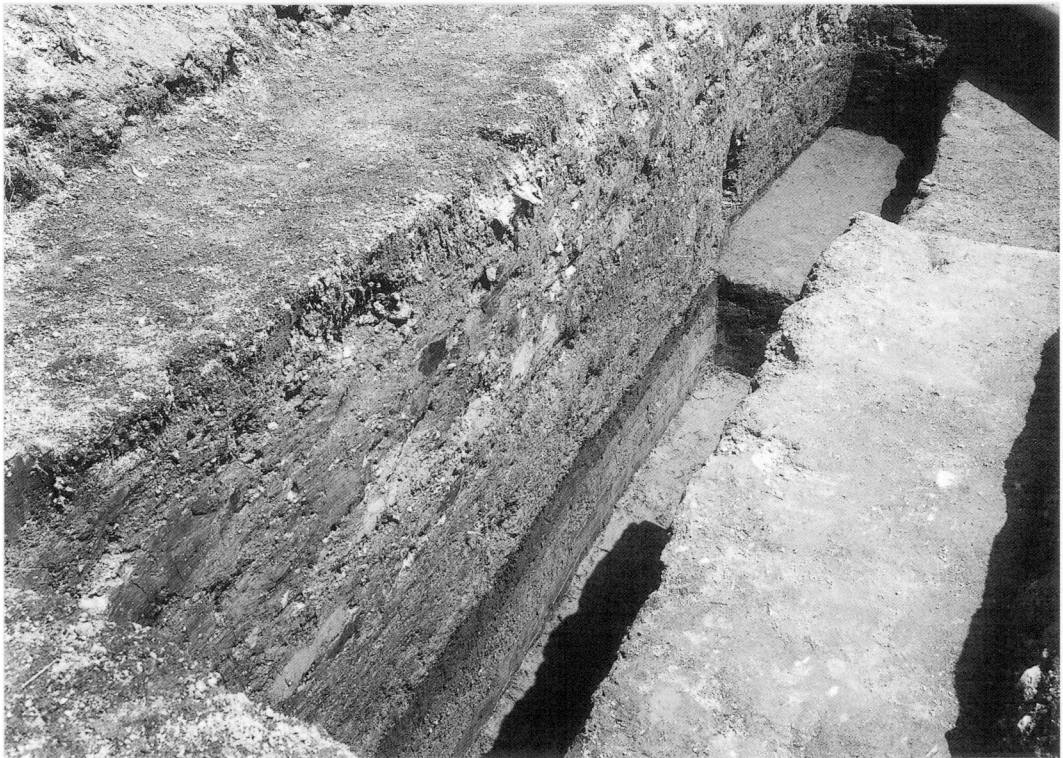


(4) E トレンチ遺構完掘状況 (東から)

吉田構内実験廃液処理施設棟新営に伴う試掘調査



(1) 調査区完掘状況全景 (南西から)



(2) 調査区北西壁土層断面 (南から)



(1) 調査区全景 (南東から)



(2) 調査区全景 (北西から)



(3) 河川1北壁土層断面 (西から)



(4) 河川2北壁土層断面 (南から)